

Museum News



絵：柳田 基

2018 春学期

展覧会

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

—学院の息吹・原田の森—

2018.4.2 (月) ▶ 5.26 (土)

学院創立の地、原田の森にキャンパスが置かれた約40年の歴史をとりあげます。アメリカ・南メソヂスト監督教会は、伝道者養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として、神戸の東・原田の森に関西学院を創立しました。

この時代には、学院の基礎となるカリキュラムや校舎などが整備され、校風も築かれていきます。その様子を学則や学生募集告知、建築申請書などの資料から紹介します。アメリカと日本、カナダの教会が協力して築かれていく初期の学院の様子と、教職員や学生たちの思いを感じとれる展示です。

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

—学院を築いた4人の院長(仮題)—

同時開催 特集陳列

ベーツアルバムから紐解く
関西学院ゆかりの宣教師(仮題)

2018.8.1 (水) ▶ 10.20 (土)

関西学院第4代院長 C. J. L. ベーツの遺品アルバムに貼られた写真から学院にまつわる記憶を掘り起こす展示です。

企画展

ポスターでたどる戦前の新劇

2018.6.4 (月) ▶ 7.21 (土)

所蔵コレクション大阪労演資料のなかから大正期から終戦直後に上演された新劇のポスターを展示します。

※詳細は4ページをご覧ください

ワークショップ「本に貼る自分だけの名札づくり」

ひょうご ミュージアムフェア

蔵書票?のワークショップ

兵庫県内の博物館が連携して取り組んでいる活動の一つに「ひょうごミュージアムフェア」があります。ミュージアムフェアでは、親子向けのものづくりワークショップやポスター掲示によるPR活動を通じて、博物館を身近に感じてもらい、来館のきっかけとなるようにアピールしています。

このミュージアムフェアに来場するのは、多くが幼稚園児や小学校低学年の子どもとその保護者です。子どもたちに人気があるのは、ものをつくって遊ぶワークショップです。そこで本学の博物館もワークショップをしようということになりました。ところが、子どもたちに大学博物館のイメージを伝えるのは、簡単ではありません。大学博物館へ行ったら、何が見られるのか。博物館の所蔵品のなかで子どもたちが関心をもつものは何かと考えました。しかも、ワークショップという形で、子どもが作れるものでなければなりません。

思案の挙げ句、「本に貼る自分だけの名札づくり」というワークショップをすることになりました。大学博物館の収蔵品のなかに原野賢吉氏より寄贈を受けた全国屈指の蔵書票のコレクションがあります。しかし、蔵書票と言っても、大人でも知っている人は少ないでしょう。蔵書票は、書物の所蔵者を示すために本の見返しに貼る名札のような紙片で、所蔵者の名前を明示するとともに、趣向を凝らした絵柄を版画などであらわします。多く

の場合、所蔵者がプロの版画家に依頼するために、美術的価値の高い作品が生まれます。

スタンプに夢中!

子どもたちには、自分の名前と動物や植物などお気に入りのスタンプを押す簡単な蔵書票を作ってもらうことにしました。名前は、ひらがなやかたかなの五十音のスタンプから一文字ずつ選び出して、押していきます。ちょうど自分の名前が書けるようになった子どもは、スタンプで名前を押していくのが楽しいようです。そして、自分の好きな動物や植物のスタンプを選んで押していくと、もう夢中です。



はたして子どもたちが蔵書票の意味を理解しているかどうかは、怪しいところですが、スタンプを押した子どもたちは「ありがとう」と言って帰っていきます。きっと「かんがくはくぶつかん」のことは忘れてしまうでしょうが、子どもたちのなかに楽しい思い出が残れば、ワークショップは成功です。

今年度は、2018年1月20日、21日に姫路のイオンモール姫路リバーシティで開催して、2日間で328人の子どもたちが蔵書票づくりに参加してくれました。また、本学の博物館学芸員課程を受講している学生8人がボランティアで手伝ってくれました。

みなさんに、感謝です。

(大学博物館長 河上繁樹)



展覧会報告 I

企画展

広岡今日子コレクション

装いの上海モダン

—近代中国女性の服飾—

日本屈指の旗袍コレクターである広岡今日子氏のコレクションの中から、上海で着用された海派旗袍を中心に、1910年代から70年代の近代中国女性のモードを紹介しました。

前期展示：2017.10.28（土）▶11.22（水）

後期展示：2017.11.24（金）▶12.16（土）

9:30～16:30

※日曜日、11月23日は休館

開館日数 42日

入館者数 3,759人



実用になかった美しさ

近代中国女性の服飾

今回の主要な展示品は、中国語で旗袍とよばれるいわゆるチャイナドレスです。私たちはチャイナドレスというと、太腿まで深くスリットの入ったセクシーな服装を思い浮かべるとともに、中国女性が古くから身につけてきた伝統的な民族衣装のように捉えがちです。しかし実際のところ旗袍は近代に登場し、1920年代から30年代に全盛期を迎えた新しい服装であり、当初は日常着としても着用したため、多くの人が想像する「チャイナドレス」とは異なる実用になかったものでした。

近年では日本においても旗袍に関する展覧会が開催され、多くの関心を集めています。このような潮流の中で、本展覧会は隣国として古くから我が国に大きな影響を及ぼしてきた中国および中国語圏の文化についてより深く知っていただくこと、本学言語教育研究センターとの共催で企画したものです。日本屈指の旗袍コレクターである広岡今日子氏のコレクションの中から、主に上海で着用された海派旗袍を中心に、1910年代から70年代の近代中国女性のモードを紹介しました。旗袍の他、アクセサリーなどの服飾雑貨、広告ポスターをあわせて展示することで、服飾としての美しさとともに、当時



右から1920年代、20年代、30年代、40年代、60-70年代

を生きた女性をより身近にいきいきとした姿で感じていただける展示となりました。



コーディネート例

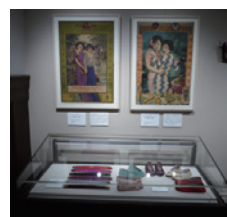
コレクター監修の展覧会

上海モダン

今回の展示では上海への留学経験をお持ちで中国関係の取材コーディネーターやライターとしても活躍されているコレクターの広岡今日子氏に展覧会監修者として全面的にご協力いただきました。豊富なコレクションの中から広岡氏自らがコーディネートした旗袍、帽子、ハンドバッグ、靴などを組み合わせた姿で時代ごとの女性の服飾をご覧いただくコーナーを設けたり、会場だけの特別出品として貴重な古写真や刺繍を施した絹靴の数々をご覧いただきました。隠れた見所は参考展示としてサイネージで流した往年の上海を写した画像の数々です。上海事情に精通した広岡氏により撮影場所が特定されたものもありました。熱心に解説を読んでくださる方も多く好評を得ました。このほか会場では1930-40年代の上海の流行歌を流すなど当時の上海のモダンな雰囲気を感じていただけたことと思います。



サイネージの参考展示



ポスター、刺繍靴などの展示

開催記念講演会

「用の美」の衰退

—「旗袍」から「チャイナドレス」への変遷をみる

会期中の12月2日（土）には、広岡今日子氏による講演（関西学院大学言語教育研究センター、国際服飾学会共催）を開催しました。ご自身の留学時のお話やクイズを交えて上海がいかに西洋的な街であるかをご紹介されたあと、旗袍についてお話いただきました。「チャイナドレス」という言葉が実は和製英語であることや、現在のチャイナドレスと旗袍の違い、女性の社会進出や戦争、中華人民共和国成立、文化大革命といった社会情勢の影響を受けながら旗袍が変化し衰退していった歴史、そして旗袍が女性解放の象徴として捉えられていたなど興味深い内容の講演となりました。

講演会後半は「台湾の旗袍（江川静英の旗袍を着る親戚達）」と題して、中国大陸の外で着用され続けた旗袍について台湾ご出身の江川静英氏（青森大学教授、国際服飾学会理事）にお話をいただきました。1960年代から現在に至るまでの家族写真に映る旗袍を拝見し、江川氏の母親世代までは日常着として着用したが、江川氏以降の世代は結婚式など特別な時に着用するものとして詠えたという体験をお聴かせくださいました。

展覧会報告 II

平常展

Gift for the Future

関西学院のあゆみ

ニュートンと時計台

大学博物館では、博物館を訪れてくださる皆さんとともに学院が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考え、「Gift for the Future 関西学院のあゆみ」と題する平常展をシリーズで開催しています。

2018.1.15 (月) ▶ 3.24 (土)

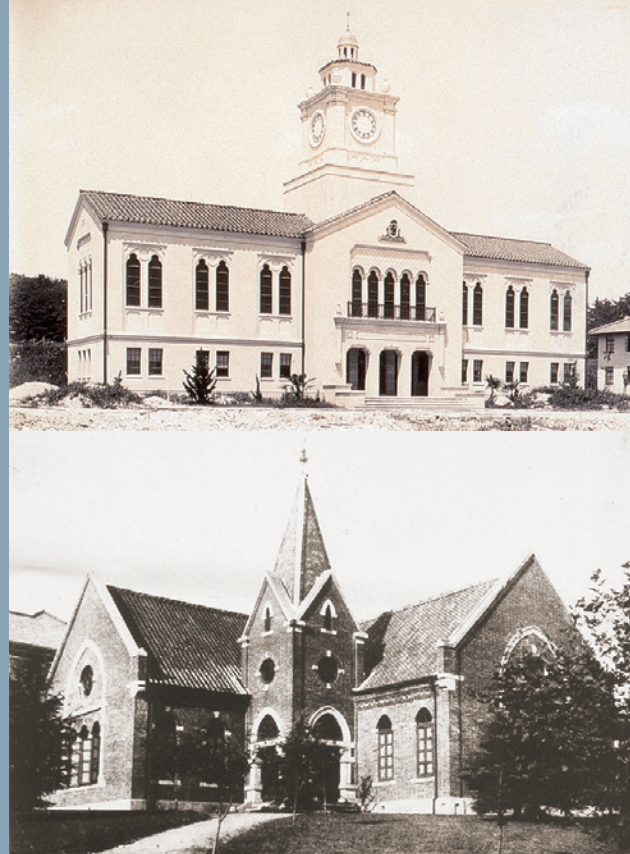
9:30 ~ 16:30

※日曜日、2月1~7日、12日、3月21日は休館

開館日数 52日



J. C. C. ニュートン



「ニュートンと時計台」というテーマで、私たちの研究生活に欠かせない図書館の創設と発展に尽力したJ. C. C. ニュートン（1848-1931）に注目しました。さらに、上ヶ原キャンパス移転の際に図書館として建てられ、現在は大学博物館として機能している時計台についてもとりあげました。また、関西学院はアメリカ人宣教師、カナダ人宣教師と日本人が国家や文化の壁を越えて、協働してきました。そこで、ニュートン以来およそ100年ぶりのアメリカ人院長を務めたルース・グルーベル第15代院長に、ニュートンの著作からみえる思想についてのコメントをいただきました。

神のような生活と精神を傾けた教育

第3代院長 J. C. C. ニュートン

ニュートンは、アメリカ合衆国サウスカロライナ州で生まれました。17歳で南軍の一員として南北戦争に従軍したことによって、宣教と教育への献身に目覚めることになります。1888年に来日し、翌年の関西学院創立とともに神学部長に就任します。1916年には吉岡美国院長のあとをついで、第3代院長となるなど創設期の学院でリーダーシップを発揮しました。

ニュートンは、常に自宅を開放し「神のような生活」と「精神を傾けた教育」で学生を育てました。関西学院の育ての親と慕われ、学生を「ブラザー」と呼んでいたことが伝わっています。1923年にプレジデント・リンカーン号で帰国する際は、1,500人も学院関係者が神戸港につめかけました。全学生は岸壁に列をつくり、大声で別れを惜しまました。



ニュートンを見送る学生 (1923年)

図書館から時計台へ 図書館のはじまり

現在、大学博物館として使用されている時計台は、上ヶ原キャンパス移転時は図書館として建てられました。本学の図書館は、学院創立の地である原田の森にて、ニュートンが来日時に持ち込んだ書物でいっぱいのトランクを開放したことから始まり、「^{しよじやくかん}書籍館」と呼ばれていました。のちに、図書館と名称が改められることになり、ニュートンが初代および第3代図書館長を務めることになります。

また、ニュートンは*Japan; Country, Court and People* (1900年) を著しました。日本の歴史や文化を紹介し、ニュートンの日本観を記したものです。この中で日本人について、「勇敢で愛国的」、「行儀作法が丁寧で優雅」、「自己犠牲の精神に富む」、「正直を尊び、勉学意欲に富む」などと評しています。*Japan* に関してグルーベル前院長は、ニュートンが心から愛する日本のために書いた長文の推薦状だとし、より平和で公正な世界のために、日本とアメリカが協力することをニュートンが願っていたであろうことに疑いの余地はないと指摘しています。さらに、展示では*Japan* の見返しに貼られた、図書館の蔵書票をご覧ください。そ

の蔵書票には、「書籍館 関西学院 普通学部」とあり、著者であり寄贈者でもあるニュートンの名前「Dr. J. C. C. Newton」が記されています。



Japan; Country, Court and People (1900年)

蔵書票

上ヶ原移転後の図書館

今に繋がる J. C. C. ニュートンとの関わり

展示した、上ヶ原移転後の「私立関西学院蔵書目録」(1930年)によると、当時から洋書の収集に力を入れており、今と変わらない学院における英語教育の重要性が垣間見えます。その他、上ヶ原移転後の図書館看板(1952年)や、当時の図書館の外観がわかる版画などを展示しました。

初代図書館長であるニュートンにちなんで名付けられた「J. C. C. Newton 賞」は、大学図書館の理念である「知的交流・創造の場としての大学図書館」に基づいて、2000年度に創設されました。この賞は2018年度をもって終了しました。展示では、第1回のチラシを紹介しました。

時計台は、現在も上ヶ原キャンパスの最も象徴的な建物と認識されています。本展示では、その建物が図書館として親しまれていたこと、また図書館のはじまりがニュートンによるものであることを知っていただく機会になりました。



次回の企画展

ポスターでたどる 戦前の新劇

2018年6月4日(月)～7月21日(土)

※展示期間中、日曜日は休館いたします。

今回の企画展は「ポスターでたどる戦前の新劇」と題して、戦後関西の演劇公演に大きな役割を果たし、2007年に解散した鑑賞団体・大阪勤労者演劇協会(大阪労演)が長年保管していた資料2万点余の中から、大正期～終戦直後に上演された新劇のポスターを展示します。

文学座や俳優座、前進座といった現在も第一線で活動する劇団をはじめ、いまや伝説ともいえる築地小劇場での公演など、選りすぐりの上演ポスター約50点を一堂に集め、戦前における新劇史の盛衰をたどっていきます。

企画展の構成は、まず1920年代以降に東京と関西で生まれ、消えていった新劇劇団の上演ポスターを取り上げて、各劇団の解説や特徴、主な作品などを紹介します。なかでも新劇運動の《橋頭堡》として1924年に開設された築地小劇場の第1回公演のポスターや、1936年に結成され関西新劇の中心的存在だった大阪協同劇団のポスターは注目です。

また、戦前を代表する演劇運動として多くの人々が関わっていたプロレタリア演劇の劇団にも焦点をあて、構成劇場・東京左翼劇場・戦旗座・

ナッパ服劇団・メガホン隊などの公演ポスターも紹介します。燃えるような力強いタッチで描かれたポスターからは、演劇の力で社会の変革を目指そうとした劇団員達の思いや、戦前の雰囲気の色濃く読み取ることができます。

そして、1933年に催された関西学院劇研究会15周年記念公演のポスターや、同窓会や運動部(現・体育会)が東京の劇団を招致し、原田の森校地にあった旧関西学院講堂で上演された際のポスターなど、関西学院と新劇との繋がりを示すものも出品します。

その他にも新築地劇団・新協劇団・心座・劇団東童・エランヴィタル小劇団など、日本の新劇を創り出した様々な劇団を取り上げて、栄光と苦難の歩みを振り返ります。

大阪労演の解散後、関西学院大学博物館が寄贈を受けた関連資料による企画展は、『戦後演劇の世界—大阪労演とその時代Ⅰ』(2011年)と『新劇、輝きの'60年代—大阪労演とその時代Ⅱ』(2012年)に続く3回目となります。「平成」の最後となる今年、これらのポスターを通して新劇史の流れとともに、いま一度「大正」「昭和」の時代に思いを馳せる機会になればと思います。



1924年6月 築地小劇場公演



1937年12月 大阪協同劇団公演



1932年1月 構成劇場公演



1933年6月 築地座公演



旧関西学院講堂



関西学院大学博物館通信 第5号
KGU MUSEUM NEWS No.5

2018.4.1

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>